

# 大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

(竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

## 京都大学新図書館の印象を語る

— 広庭基介氏のレポート —

大図研京大班例会

大図研京大班は去る10月1日、附属図書館の大図研会員広庭基介氏を講師に招いて、まだ私たちが外観しか見ることのできない新館の第一印象を話してもらった。参加15名で盛会であったが、以下に同氏の談を要約する。

### (1) 一階と二階

「聞きしにまさる」という言葉があるが、設計図から予想していたよりずっと立派な建物だと思った。計画のごく初期には否定されていた玄関の吹き抜けであったが、それを採用したことは成功であった。何故なら、風除室の天井が低いので、そのまま低い天井が奥まで続くと、頭をおさえられた気持のままになるのだが、その次に一旦広く高い吹き抜けがあることで非常に救われているからだ。

一階の参考図書、雑誌閲覧室及び二階の開架閲覧室は学生院生が主たる利用者となる所であるが、そのひろびろとした光景は、今までに見学した他大学では見ることのできなかつた程の壮観である。2千平米に及ぶ床面積が一つの仕切りもなく、自由開架閲覧という一つの目的のために使われているのは実に圧巻である。利用者は東西南北どこでも自分の好みの席で読書勉強ができる。なおタイプライターを叩く利用者のために遮音された部屋

も2室用意されている。この一階、二階の大閲覧室に面しているエレベーターのドアには銅板にエジプトのヒエログリフが彫刻されているなど、学生利用者向けの設備は実に豪華である。外からの容姿と共に、さすがは京大であると感じさせられる。もっとも、利用者が入館、退館の機械管理がスムーズに作動し、図書利用が昔よりも便利にならなければ、九仞の功を一簣に欠くことにもなりかねないが。

### (2) 三階と四階

次に凄いのが三階のAVホールである。約120席あって、丁度四階の光庭の真下にあたる所であるが、ここの赤い椅子は立派すぎる程の外国製で、照明も無段階で明暗が切りかわる映画館並みのものとなっている。しかし他大学にもよくあるように、このようなAVホールを本当に使いこなし、蜘蛛の巣をほらせないように運営していくことが大変であろう。以上の他に、三階では、研究個室が12室あるが、ここも一般的なその二倍以上の広さを持ったゆったりしたものなので、開館後は利用者のとり合いになるにちがいない。

また三階には、開架閲覧室以外では最も長い一辺を持った特殊資料室が北側にあって、そこにHRAFやOECDの資料、マイクロフィルム文献などが納められる筈である。な

お三階には整理課事務室が南面にあるが、このトイレは、設計段階から判っていたことだが、男性の大为本当に無いのは、矢張り将来不安である。

四階で最も目につくことは、どの部屋も景色が素晴らしいということであろう。これほどの景色を見ることのできる建物は、京大はもとより京都市をさがしてもそれほど多くはないのではないか。その分お隣の教育学部や経済研究所の方々には誠に申し訳ないことになった次第である。更に四階の中央には光庭があって、ガラス越しに外光や雨、雪が見られるので、非常にモダンな感じがする。一緒に見てまわっていたKさんなど、「まるでホテルみたい。京大会館より美しい」と感心していた。四階には又、立派な会議室をはじめ、近い将来、コンピューターが入る筈の二重底の床（フリーアクセスといって、床下に配線が入り、どこからでもそれをとり出せる）の部屋や、全学の図書館学を勉強する人々のための資料室、学術情報センター構想にもとずく近畿北地区に属する国立大学図書館がネットワークの形成のために寄り合う地域共同利用室、総務課事務室、職員ロッカー室、シャワー室、職員休養室の他、立派な館長室、部長室、応接室などがある。館長室と応接室の天井の常光灯はどこ製の製品か知らないが、大へん洒落た綺麗なルーバーが見事である。

それにしても、この四階からの眺め、吉田山から教養部グラウンド北端の楠の梢越しに広がるわが京都の全景の美事さを是非一見して頂きたいものである。

### (3) 結 語

思い起してみると、新館の設計が発足しようとする三年前、新館ワーキンググループが置かれて、職員の要望や意見を吸収することも一つの任務としていたにもかかわらず、グループ員が、設計事務所、施設部と直接自由に懇談したことは一度もなかったことは誠に残念であった。これは全館員の気持であろう。

たった一度だけ、館当局、施設部、設計事務所の会議にグループ代表が倍席を許されたことがあって、席上、整理課職員トイレの不足を発言したがとりあげられずに終わった。もともと館員のみによる荒い設計段階では、新館はモジュール構造をとるプランであり、書庫も各階に分散して作る方針であったが、建築費が高くつくということから、エレベーター、階段、トイレなどを中心のコアに入れるというモジュール方式特有の配置は残しながら、フィクスト・ファンクション方式で建設した所に、この建物の長所と短所が今後出てくるのではなかろうか。

ともあれ、完成したばかりの新館を見てまわると、予期していた以上に立派な館になっており、われわれ建築の素人には到底想像できなかった重厚な雰囲気漂っている。変哲もない真四角のビルにこのような雰囲気を与えたのは、さすが専門家だなあと感心する。特に、身障者対策を含む利用者向けの諸設備は、どこに出しても恥かしくない豪華さである。身障者への配慮としては、玄関のスロープから、視覚障害者用の誘導電子チャイム、要所要所の床面点字タイル、エレベーター内の音声による案内やトイレの点字サインと車椅子対応装置、救急ボタン、対面朗読室の設置など、現時点ではほぼ完全に近いものである。車椅子の通向を考慮して各階の床面にはたった一つの坂も凸凹もない。

更に特筆すべきことは、幾つかの省エネ対策である。例えば、開架閲覧室、目録カード室など南面する部分で不必要な電灯を、センサーによって自動的に消灯する装置や、小部分で空調を調節出来るように機械室を各階に設けたこと、すべてのカーペットが約50センチ平米毎にめくって交換できるようにしたこと、さらにトイレの水洗も使用後のみ作動するようになっているなどである。

以上述べた如き利用者向けの諸設備、諸配慮に対して、やや問題の残されているように見えるのが館員の勤務上必要な設備と、書物

の保全に関する設備である。例えば、掃除後のモップや雑巾を洗う設備が極端に少ないことをはじめ、汚れやほこりの多い書庫内蔵書を頻繁に扱う閲覧課に手を洗う所がないこと。湯沸し室はあるが狭隘な上に、ゴミを捨てる設備が皆無であることなどがあげられるし、書物保全については、貴重書庫が米杉ながら全室板張りで完全空調を行うことは国立大学図書館としては珍しく豪華なことなのであるが、何しろ書庫全体が地下に潜っているため、新方式の密閉トレンチ、換気、大量の除湿機設置という現在の対策によって、最下層の集密書架に納架される百万冊の図書が湿気から十分守り切れるかどうか、今後の推移を見守らなければならない点である。

書庫の防火は、図書に注水出来ないの、ハロンガスを放出して酸素を欠乏させて消火するそうであるが、このガスが高価なので、少量の放出ですむように書庫内はいくつかに防火壁で仕切られている。そのため入庫者が自分の位置をす早く知ることができるよう誘導なり、指示を与えることが不可欠である。

万が一、火事になったは、自分の現在位置は判らないは、ガスが出て酸欠になるは、ということになると大変である。

最後に一口で新館の印象を述べるならば、さすがに京大の図書館である。今までに見学してきた多くの他大学の図書館に比べてみても決して勝るとも劣らない堂々たる風格の大図書館であり、特に身障者を含め学生、院生をはじめ、利用者の読書環境の確保という点で見事である。こまかい不満や難点はあるけれども、これは確かに図書館界に誇りうる大図書館であって、ここまでまとめてこられた関係者の御努力に敬意を表さなければならない。

あとは、旧館に比べて部屋数も面積も収容人員も3倍の大きさととなり、電気消費量などのランニングコストも数倍にはねあがるだけでなく、定員削減や、マイナス、シーリングが続くという条件の中で、その困難をどのようにして克服し、十分に使いこなして、学内外に対して公約通りに奉仕活動を展開しうるのか、すべてはナマ身の私達館員諸兄の双肩にかかっているといえるのである。(要旨)

## 武漢大学・図書館学部の話聞いて

堤 美智子  
(京都大学)

中国の武漢大学からウイルス学研究のために来日された女性研究者林さんから武漢大学の図書館学部の話を知りましたので紹介します。

中国には全国で図書館学部があるのは北京大学と武漢大学の2校のみです。武漢大学は創立70周年になり創立から数年して1920年に図書館学部ができています。図書館学部は図書館学科と科学技術情報学科の2学科に分かれています。教員は64名、学生数は413名、更に通信教育の学生が552名、自費で勉強している学生が76名(年間の学

費は200元、日本円で2万円位)大学院生が23名。中国ではアメリカ式にある学部を卒業してから、更に図書館学部に入るのだそうです。学科目は概論、分類学、目録、外国語文献、科学技術文献、電子計算機原理、情報検索、視聴覚資料、図書保存etcで日本とはほぼ同種と思われそうですが、情報学部の方はさすがに数学の各種課題、物理、科学史etcの学科がギッチリと挙げられています。コンピューターによる情報検索など盛んですかという質問には「そんなに多くありません。」というお答えでした。

武漢大学の図書館はキャンパスの北の端で学生宿舎（中国の大学は全寮制だそうです）と学生食堂に近接しています。写真でみると中国風の屋根がそった、瓦ののったお城の様な古風な建物です。蔵書は170万冊。京大と同じように現在新しい建物を建設中（別の敷地に）だそうです。

武漢大学のキャンパスの中には3つの山があり、湖に面しています。さすがに広さのス

ケールが違う様です。

日本では異常な位に図書館界には女性の数が多いのですが、中国では男性の方が少し多いというお話でした。林さんは自然科学者でありながら、畑違いの図書館学科のことなどいろいろ詳しい事を話して下さいました。中国の大学における図書館の立場をもしかしたら反映しているのかも知れません。

## —会員への手紙—

### 今こそ、利用者と共に構築する大学図書館改革運動の実践とその理論活動を

支部委員会

会員の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。支部委員会は9月に新しい体制で出発し、はや2ヶ月になろうとしています。

その間、月例会は、竜谷大学教授大月誠氏による「ドイツの参考図書解題」を18名の参加を得て、内容豊かに行なわれました。11月の月例会も26日に大阪外国語大学助教授庄森将人氏を迎え、「ソビエトの参考図書解題」を、そして、12月の月例会には大阪教育大学教授塩見昇氏による「教育としての学校図書館」を24日におこなうことになっています。

一方、参考図書研究会、MARC研究会、理工学文献研究会、西洋書誌学研究会、「概説標準目録法」学習会、JLAの本「学術雑誌」を読む会（結成準備中）等々の学習サークル研究グループ活動は盛んになってきました。

そして、大図研活動のエネルギーの源である班活動と同志社大学、京都大学と定着してきています。京都大学では、10月に「附属図書館の新館をめぐる」広庭氏より含蓄のある報告を15名の参加を得て、班例会を成功させています。また、11月には「大図研

論文集10号」の合評会、12月には「附属図書館問題シンポジウム」が企画されています。

京都支部は今、着実に発展しています。しかし、今日の大学および大学図書館をとりまく情勢は、私たち大学の学生・教職員等すべての大学人にとって決して好ましいものではありません。

これらのきびしい状況を学問の発展と高等教育の発展とを統一させながら、すべての大学人の発達を保障する道を今こそ見極めなければなりません。

立命館大学の仲間の利用者アンケート活動とその出来るところからの実践が示すように、私達大学図書館の発展にとって大切なことは全大学人による大学改革であり、利用者と共に構築する大学図書館改革運動を展開することです。

今こそ、全構成員による大学図書館づくりを理念とする大図研の力を発揮する時です。

できるところからの大学図書館改革運動を実践し、その理論的構築をすすめましょう。

そして、その成果を4月28日～29日に開かれる第10回全国研究集會に持ち寄りましょう。

敬 具

（文責 竹村）